

明治一三年初の青森県情（上）

佐々木高行奥羽巡視『復命書』より

一 佐々木高行の奥羽巡視

—— 解説をかねて ——

明治一二年一〇月二三日、元老院議官佐々木高行は左のような二つの辞令をうけた。即ち、

「宮内省御用掛被仰付候事

明治十二年十月廿三日 太政官」

「御用有之、奥羽地方へ被差遣候事

明治十二年十月廿三日 太政官」

というものである。(1) このうち前者の辞令が出されたのは、その直前の一〇月一三日付で宮内省中に置かれていた天皇の側近として天皇の補佐にあたる侍補職が廃止されたこと、その廃止は佐々木高行や元田永孚ら侍補グループが、君徳輔導を更に一步進めて天皇親政の運動をおこし、参議政治に対する批判を行い政府参議特に伊藤博文らと対立したことの結果であったこと(2)、その結果として佐々木や土方久元、吉井友実らは「向後心付ノ件、従前ノ通、以聞スヘキ(3)」との勅をうけ宮中から去っていたが(4)、以上のような明治一二年における政治状況・経過を前提として、元老院議官の本官にもどっていた佐々木に対する処遇としての宮内省御用掛任命ということであった。そしてそれと同時に佐々木に対して奥羽地方の巡視が命ぜられたのであり、天皇

沼田哲

は彼に対して「該地方民情篤ト視察スベシ」との勅を与えている。なおつけ加えておくならば、政府の高官を派遣しての地方巡視ということとは、この事例が最初ということではないし、また以後にもあった(5)。更に明治天皇の地方巡幸が実に大規模にしかも何度も行われていたこと(6)をもあわせて考えるならば、これらは政府の地方の動向に対する対策、地方民心の中央への収攬の手段としての政治的意味は大きいと考えられよう。勿論個々の巡幸や巡視が有した具体的な政治的意味は、その折々の政治情勢や政府の意図などによって異なっているであろう(7)から、佐々木高行の奥羽巡視の政治的意味についても考えてみなければならぬ。

さて佐々木の日記に

「十月廿九日、晴、陸羽地方視察ノ為、東京ヲ出発、関宿ニ泊、随行員、宮内属、同雇藤田一郎(8)」とある如く、一〇月二十九日に東京を出発し、翌年三月一日に帰京するまで一三四日、四ヶ月半にも及ぶ大旅行が始まる。ところでこの旅行の行程の詳細について、佐々木の日記は意外な程に記載事項に乏しいのであり、その全体を知るには

不十分である。しかしながら、前引の日記に随行員と記されている藤田一郎が、実に詳細な記録を残しており、それによってこの巡視旅行の全行程を知ることができるのである。この記録は『奥羽記行』と題され、各冊約六〇丁前後の冊子で二〇冊に及ぶものであり、宮内庁書陵部に所蔵されている写本を閲覧することができた⁽⁹⁾。この『奥羽記行』自体興味あふれる内容のものであるが何分にも大部のものであり、注にも示した如く青森県に関する部分だけでも六冊にもなるので、その全部を紹介することは不可能である。そこでこの史料によって巡視旅行の行程を概略的な形で示したものを表Ⅰとして掲げ、更に本稿がこの巡視後佐々木高行が作成した天皇への『復命書』の中の青森県の部分を中心として紹介するという目的であることに対応させる意味で、いささか煩雑ではあるが『奥羽記行』の中から青森県内における佐々木の行程、その間に彼が接した県内の人物の一覧を、日程順にまとめたものを表Ⅱとして紹介しておきたい。この二表によりその行程を見ると、山形・秋田両県の巡視に夫々約一ヶ月を費し⁽¹⁰⁾、青森県内では約一ヶ月半をかけている。特に青森については県内の交通事情の悪さ、また冬の大雪の中⁽¹¹⁾であるにもかかわらず、きめ細かく各地を巡視しており、下北半島にまで足をのぼしていることなど、表Ⅱの示す如くである。(勿論他の県でも各地を巡視し、表Ⅱに見られるのと同じようにに多くの人々に会い陳情などをうけているのである。)そしてその過程で得た知見が後述の如く『復命書』中に多く反映されることになるのである。明治一三年一月、青森県内巡視中の佐々木は、三条実美・

岩倉具視に宛てた書簡の中で「…今般山形・秋田・青森三県巡視仕候

處、先以テ差向云々モ無之候へ共、米価騰貴ヨリ、種々別テ士族連ノ苦情甚シク承リ候、三県自ラ土地人情モ異ナル所モ有之候へ共、概シテ見候所ハ、陸羽ハ何分、朝廷ヨリ度外視ニ被置候トノ人々感觸ハ、甚シキ様被察候、就テハ何事モ御趣旨モ不貫徹ノ光景ニ有之候間、高行ノ愚考仕候處ニテハ、陸羽地方ハ屢々高官ノ向等巡回被致、出京ノ節ハ要路ノ人々ヨリ私宅ヘ相招キ、事情モ能ク々々懇話致シ候様相成候ハ、自然御趣意モ貫徹、疑念心モ相解ケ可申候ト存候……⁽¹²⁾」と述べているが、このような認識は佐々木の東北地方理解とその後の彼の行動の爲の基礎となった如く思われる。

さて佐々木の奥羽巡視は二月一八日に岩手県に入り、二月二八日まで盛岡に滞在しながら継続されていたが、同日東京より帰京命令の電報がもたらされ、巡視を終らせ急遽帰京となったのである。三月一日帰京した佐々木は同日の日記に次の如きメモを記した。

「三月十一日、陸羽ヨリ帰京ス、

右巡回ノ節箇条書、

- 一 地租改正ノ事、本条ニ付苦情数件、
- 一 山林局ノ事、本条ニ付苦情ノ件、
- 一 酒造税ノ事、本条ニ付苦情ノ件、
- 一 収税員ノ事、本条ニ付苦情ノ件、
- 一 米価騰貴ノ事、本条ニ付士族并平民中等以下苦情、
- 一 旧庄内藩開墾ノ事、本条維持困難ノ件、
- 一 旧秋田藩士族ノ苦情、本条ニ付、奉還條云々、
- 一 旧弘前藩士族、本条ノ内廃卒云々、

一 旧米沢藩士族ノ奉還禄云々、
一 旧南部藩士族、廃卒・廃士族・廃徒士等苦情ノ事、
一 旧斗南藩士族、苦情幾派ニ別ル、皆其事由アル事、
其外、士族困窮ヨリシテ、種々様々ノ景況也、

右巡回中見込

一 改租ニ付人民不安心ノ事
一 邪蘇宗ノ事、
一 凶荒予備ノ事、
一 代言人ノ事、
一 事情ニ依リテ中立被行候事、
一 旧藩主ノ指令ハ信用スル事、
一 廃卒云々ノ事、
一 学校教員年少ノ事、
一 牛馬耕作云々ノ事、
一 郡長等、其県又ハ他県ノ者両様得失ノ事、
一 堤防崩潰ノ事、
一 開墾地薬料ノ事、
一 旧采ノ産物退歩ノ景況ノ事
一 慣習ヲ廃シタル弊ノ事、
一 紙幣ヲ賤ミ、金銀貨ヲ貴ビ候ハ、細民モ一般ノ事、
一 紙幣下落ニ付、会計逼迫ノ疑念ヲ起ス事、
一 小札小錢不自由ノ事、
一 長慶天皇御陵ノ事、

一 猿賀神社ノ事、
一 相馬藩民政ノ事、
一 蒲生ヘ位階ノ事、

以上

「⁽⁴³⁾

この各箇条を見ると、後掲の『復命書』中にそれらの殆んどが
もりこまれていることが明らかである。佐々木は四月になって早々に
天皇に対し巡視の報告を行った⁽⁴⁴⁾。日記によれば「陸羽巡視ノ復命ニ付、
屢々奏聞ノ末、聖上御沙汰ニ、夫々事情相分り候、此上ハ三大臣并ニ
内務等ノ其地方担任ノ者ヘ可申聞、手許ヨリ遣シタル者ノ見ル處、十
分其筋ノ者不心得テハ不都合ナリ、又、事業ヲ勉励シ、人々ノ励ミト
相成ル廉々ハ、新聞紙上ヘ掲載セヨトノ御沙汰ナリ、因ツテ其取計セ
リ⁽⁴⁵⁾」とあり、『復命書』はこの折に提出されたものであらう。佐
々木は岩倉具視に対しても奥羽地方事情の報告を行っているが、岩倉
は「士族ノ生産ヲ授クル事ハ、自分ハ大ニ熱心セリ、就テハ其辺ノ事
ハ足下ヨリ十二分ニ奏聞アレ」と述べたので、佐々木は「高行勿論、
其辺十分ニ申上ゲタリ、只要路ノ向々、本氣ニ相成候ハズ、何事モ成
就スベシ……且陸羽等人物、成ル大官途ニモ登用シ、又人民ノ有志者
ヘモ充分御親ミ有之度、菟角、陸羽人民ノ情ニテハ、陸羽ハ度外視セ
ラル、ノ感触甚ダシク、薩長土肥ノ人々、私スルト而已思ヘバ、御注
意尤肝要」⁽⁴⁶⁾と、岩倉に対して士族授産にしても要は政府当局者の態
度次第の問題であると強調し、更に戊辰戦争以来の奥羽地方の明治政
府に対する感情を、自らの接触してきた経験によって説明し、士族を主
たる対象としつゝも奥羽地方の人民の人心を政府が収攬する為の方策

にも言及している。佐々木は伊藤博文に対しても陸羽事情を説明したが、「士族授産ノ事ハ中々不容易ニ付、博文ノ考ヘニハ、毫千萬田ノ内国債ヲ募集スレバ、著手出来ルトノ見込ニ候ヘ共、内閣ニテ同意ヲ得ズ、因ツテ、聖上ヘ其段申上ゲタリ」との伊藤の答えであるので「其御見込被行ズ共、熟レ何トカ御盡力有之度」と伊藤の助力を求めている⁽⁷⁾。松方正義は佐々木の説明をうけて、佐々木が言うところの、士族授産は三本木、津輕、秋田などに開墾場を設けて士族を移住させ生業を与えるという方策に賛成したので、佐々木は安心してゐる⁽⁸⁾。

ところで以上の如き帰京後の佐々木の報告などにおいて重要な問題として扱われ、また岩倉具視が強い関心を払っていた問題の一つは士族授産ということであつた。佐々木は奥羽各地において士族の窮状を見聞し陳情され、そのことに同情しているが、それは同時に士族が定職をもたず遊民化し、更には政治的には反政府的心情のままに例えば自由民権運動に参加してしまうといった状況を重大な問題と認識していることとあわせて、士族に対する政府の適正な政策がとられることを求めるということになつてゐる。この奥羽巡視の政治的意味の一つは、まさしくこの士族のおかれた状態、彼らの動向といったことに政府としてどのように対処すべきかという問題にかかわつて存在すると言えよう。例えば佐々木が『復命書』において青森県内各地の士族の状況について述べる時、弘前士族が「未ダ就産ノ目的ナク、優遊以テ是日一日ヲ過ゴスガ如シ」という状態にとどまつてゐることを心配し、大道寺繁禎らによる結社・興業社が「木材耀賣ノ法」と「養蚕製糸ヲ目的」として「専ラ士族就産ノ法ヲナサン」としてゐることを標榜し、

或は斗南士族の三本木開墾に従事してゐる者達は「困苦見聞スルニ忍ヒス。実ニ子ヲ売り妻ヲ遂フノ歎アルガ如シ……コノ輩開拓事業ノ半途ニシテ廃業セラルトヲ憾ミトナシ、且ツ其レカ爲メ目下生計ニ困難スルヲ歎息シ、再ヒコノ業ヲ起サンコトヲ切望セリ、高行思ヘラク、是ヨリシテ以テ保護ヲ加ヘ、早ク土着ノ法方ヲ授ケハ、果シテ向來爲スコトアラン」と述べてゐるところなど、また表Ⅱを見ると明らかなように、巡視中佐々木に面会を求め陳情を行った人々（士族が多い）の意見にも士族の困難と救済という内容が多いこと、更には、佐々木の帰京後、彼に宛てられた青森関係者の書簡の中にも士族の授産事業の願ひ、救助願ひや、それらに対する佐々木の助力への礼状などが多く見出される（表Ⅱ⁽⁹⁾参照）など、佐々木の士族授産の爲の尽力が多いこと、彼の関心の強さをよく示してゐると言えよう。勿論これは青森県に対してのみのことではなく、山形・秋田など奥羽地方全体についての同様の問題に対して努力がはられてゐるのである。

また前述のように政府内では岩倉具視が士族授産について関心が強かつたのである。即ち彼は明治一一年七月に閣議に「士族授産ヲ請フノ議」という意見書を提出してゐた。その中で、金禄公債証書発行後政府は士族に対して十分な保護政策を加えるに至つていないことを述べ、次いで明治維新以後現在に至るまでの進展に力のあつた士族を、「若シ我國ヲシテ固ヨリ士族ナカラシメバ我國ノ景況ハ猶支那朝鮮ノ萎靡振ハサルカ如ク決シテ今日ノ進路ニ至ルコトヲ得サルハシ」と評し、国家が榮えるのは「中等社会ノ振起スル所ニ属シ我國ノ治安モ亦中等社会ノ上下ノ間ヲ扶持弥縫スルニ依ル蓋シ我國士族ハ一種中等

社会ノ良善ナルモノ」であると考えられるにもかかわらず「今マ士族ハ窮困ニ迫リ手ヲ空クシテ策ナク妻ヲ養ヒ子ヲ育スルノ計其出ル所ヲ知ラス」との状態になつてゐる。士族がそのような状況にある時に「恰モ欧州ノ過激自由ノ説我カ邦ニ輸入シ非常ノ速力ヲ以テ都鄙ニ伝播シ尤モ在野政党士族ノ脳髓ヲ刺衝シ其毒分深ク無形ノ間ニ根柢ヲ團結シ従来固有スル所ノ忠孝淳朴ノ風ヲシテ殆ント将サニ一掃セシメント士族ニシテ果シテ此ノ如クナルトキハ其弊ヤ所謂平民ナルモノ、脳髓ヲシテ亦此風俗ニ浸染セシムルニ至ラン」と、自由民権運動が士族に及ぼしている影響を危惧シ、「政府ハ今ニ及テ適當ノ處分ヲ以テ保護ノ方法ヲ施ストキハ猶其過半ヲシテ純良ノ士タラシムヘシ」と、士族を「純良」つまり政府を支持する側に立たせるための対策、すなわち士族授産の実施を主張するのである⁽²⁾。岩倉は明治一四年七月にも再度士族授産の意見書を閣議に提出しているが、その趣旨はほぼ同様である⁽³⁾。このような彼の意見の基礎として、政府を支持する基盤に士族の多数をまきこんでおくことがまず必要であるという認識があり、それは自由民権運動の活発な展開過程において士族が果たしていた役割について、反対者の立場からそれを重視したこともある。そして士族対策の問題は例えば、所謂明治一四年政変の最終段階であつた一〇月七日に、井上毅が岩倉に提出した意見書には、この政治危機を政府薩長の主導のもとでのり切るためには、天皇の詔勅の発布が是非とも必要であり「此ノ勅諭ハ仮令急進党ヲ鎮定セシムルコト能ハズトモ優ニ中立党ヲ順服セシムヘシ、全国ノ士族猶中立党多シ今此挙アラサレバ彼等モ変シテ急進党トナルコト疑ナシ⁽⁴⁾」と、士族層を政府にひきつけ

ることの重要性が強調されるという形でもあらわれているのである。このように見てくるならば、士族授産の政治的意味は明らかであろう。なお佐々木に関しては、この「復命書」でもその片鱗はうかがえるが、彼の政治的立場は前述の待補時代の天皇親政運動の政治的意味からも明らかなように、政府当局者に対して批判的立場であるし、一四年政変においても、中政党⁽⁵⁾のリーダーとして保守主義的立場からの政府攻撃・政治改革を企てるのであり、その意味では一貫しており、政府とは全面的に同一ではなかつたし、発想も異なるのであるが、士族授産についての考えでは明らかに岩倉とは共通のものを見出すことができると思う。

またこの奥羽巡視が佐々木高行に与えた政治的意義はもう一つあると言えよう。すなわち士族授産問題などに典型的にあらわされたのだが、佐々木がこの問題をはじめ「奥羽地方に於ける諸般の施設に就き、政府と人民との間に介在して極力斡旋⁽⁶⁾」したことから、奥羽各県と佐々木との関係はこの巡視以後親密さを加え、各県の県官・士族・人民の佐々木に頼ることが多くなつたといわれる⁽⁷⁾ことである。青森県について見るならば、表⁽⁸⁾がそれをよく示していると言える。「復命書」においては県令山田秀典⁽⁹⁾の施策に対して高い評価が、例えば「夫レコノ青森県ナル者ハ、置県以来不幸ニシテ県令其人ヲ得ス、明治四年ヨリ九年ニ至ル、県令全ク五名ヲ換任セリ、コレニ依テ県治一モ其法ヲ得ス、喧噪シテ歲月ヲ過コスカ如シ……然ルニ今ノ県令山田秀典、コノ県ニ赴任シ、始メテ真正ノ県治ヲ布クカ如シ」という如く、与えられており、具体的にはその農事改良における馬耕奨励⁽¹⁰⁾や、学

校建設における学田設定などを挙げてゐる。このことは注意すべきであらう。それは青森県政史における山田県令期をどのように評価するかという問題⁽²⁾に関わつてくると思うし、明治一四年後半に

における書記官や県会議長・郡長らとの対立事件をも含めて考えねばならないと思はれる。また佐々木は巡視により、以後県内各地の士族や有力者達との接触を持ち続けることになる。彼らは表Ⅰに見られるような書簡による交流のみではなく、上京した折には佐々木を訪ね、或は佐々木の紹介を得て政府の有力者・担当者（例えば岩倉など）へ接近し、陳情などを有利に運ぶこともできたのである。一方佐々木は彼らを通して以後も青森県内の政治状況などを一定程度知ることが可能となつたのである。勿論その場合、佐々木との関係を有する県内士族などが、例えば県政においてどのような政治的立場を有する者たちであつたかは、表Ⅰの限りでは明らかに、県内の自由民権派とは対立する部分であつたことを示している。その中では特に県会議長大道寺繁禎、中津軽郡長笹森儀助との関係は表Ⅰに見る如くであり、佐々木は「大道寺ハ、門地家ニテ頗ル人望有リ、尤モ、才氣ハ無之、篤実ナレバ、事ヲ取りテハ、左ノミ用ニハ立タザル歟ハ知レザレ共、如此人物ハ、官途ニ就カシメバ、辺境ノ人情モ分カリ、亦東奥ノ人心モ幾分カ政府ニ望ム属スルノ一端トモナラン歟ト、申立テタレ共、未タ採用ナシ⁽²⁾」と大道寺の如き有力者の採用が奥羽人心の収攬の爲に必要であると考えており、また笹森については「一癖アル人ニテ、大ニ産業ヲ起スノ志有リ、他日一事業ヲ成サン歟、望ミアル人物ナリ⁽³⁾」と高く評価している。笹森の伝記によれば、笹森が大道寺らと始める農牧社

の経営は、佐々木の巡視の際に士族就産の事業を起すことを強く勧められたことに關係している如くである⁽⁴⁾。

以上いささか羅列的未整理なままに「復命書」の紹介の爲に佐々木高行の奥羽巡視の政治的意味を中心に論述してきたが、それは「復命書」成立のいわば政治的背景を提示したということに止まつて、内容の個々についての論及はわずかであつた。「復命書」が史料的に意味を有するのは、一つには前述してきた如き政治的背景を前提に、むしろ明治一〇年代前半期の青森県政史に対しての役割如何ということであらう。一〇年代の県政史に關しては従来から自由民権運動についての研究がある⁽⁵⁾わけだが、それと對抗的な立場にある県政界の人物や彼らと佐々木高行とのつながりなどが明らかにされてゆくならば、研究のふくらみを増すであらうと思うのである。ここで紹介する史料はいふなればこの明治一〇年代前半の青森県の状況を明治政府の一高官の目を通してとらえたものであつて、ここに見出される種々の認識や評価は、或は同時期の青森県人との間にズレを有しているかも知れないが、ともかくも紹介の価値があると思つた次第である。

注(1)「保古飛呂比 佐々木高行日記八」 三六〇頁（以下においては「佐々木日記」と略記する）。

(2)この侍補による天皇親政運動については渡辺昭夫「侍補制度と『天皇親政』運動」（『歴史学研究』二五二号）をはじめいくつかの論文がある。なお拙稿「元田永孚と『君徳輔導』論」「文経論叢」一三四、弘前大学人文学部）もこの間の思想的分析を試みている。

(3) 『佐々木日記』八、三五四頁。

(4) 元田永孚は侍講として以後も天皇の側近にとどまっていたし、元田と佐々木達との連携は以後も密接であった。

(5) 例えばこの明治一二年前後の時期についてみて、『明治天皇紀』からもいくつか挙げられる。

明九・七・二九 太政大臣三条実美、参議寺島宗則・伊藤博文・

山県有朋に北海道巡視命令（八・六出発九・三〇迄）

明一・九・一七 侍補佐々木高行・侍従西四辻公業に山形県巡視を命ず（北陸巡幸随行途中より差遣）

明一二・七・一〇 コレヲ病流行状況視察の爲侍従長米田虎雄を

京摂地方へ差遣（七・一六発八・八帰京）

明一二・一〇・二三 佐々木高行奥羽巡視（本件）

明一三・四・一五 侍従高辻修長を福島・宮城・岩手三県差遣を命ず（これは後述の如く、佐々木の巡視を岩手県で中止させたことを補うため）

明一五・四・一〇 参事院議官安場保和を東海・東山地方に、同

渡辺昇を九州地方へ、同中村弘毅を南海地方へ、元老院議官河

田景与を中国地方へ、同河瀬真幸を奥羽地方へ、夫々差遣し民情を視察せしむ。

(6) 主なものを挙げると左の如くである。

明 5.5.23～7.12 大阪、中国、四国、九州巡幸
明 9.6. 2～7.21 東奥（福島、宮城、岩手、青森、函館）巡幸
明 10.1.24～ 大和及び京都行幸
明 11.8.31～11.9 北陸東海両道巡幸
明 13.6.16～7.23 山梨、三重、京都巡幸
明 14.7.30～10.11 山形、秋田、青森、北海道巡幸
明 18.7.26～9.12 山口、広島、岡山、兵庫巡幸
… 下 略 …

参照『明治天皇行幸年表』

（昭8.明治天皇聖蹟保存会編）

(7) 例えば注(5)に掲げた明治一五年四月の各地への巡視命令は、前年の所謂一四年政変後の地方動向を把握する為のものであることは明らかである。

(8) 『佐々木日記』八・三六二頁。

なお「随行員宮内属」とあるのは宮内省十二等出仕細田次朝であり、「同雇」とは宮内省御用掛藤田一郎である。

(9) この史料は『宮内庁書陵部和漢図書分類目録下』に「奥羽記行佐々木高行奥羽巡回、藤田一郎、明治一二・一三年写、二〇冊、C三函（一〇六号）」と記載されており、その各冊は例えば

「巻之一武蔵の真秋 自明治十二年十月廿九日至十一月三日 東京発より福島県下岩代国岩瀬郡湯本村まで」

といった表現を掲げている。その一々について掲げることは煩雑であるので、省略させて頂くが、青森県関係は、「巻一四、青森の真雪を…」

から「巻一九 三戸の初春…」に至る六冊を占めている。

(10) 福島県を経由して山形に移ったのであるが、福島県の東部巡視については帰途の經由の予定と思われる。山形県の巡視は佐々木にとつては注(5)にあげた明治一一年九月にすでに行っていたといふことがある（なお国学院大学図書館に『明治一一年佐々木高行山形行軍記』と題する写本一冊が蔵されている）。秋田県に入ってから、佐々木は表一に示した如く八日間には病気で久保田（秋田）に滞在を余儀なくされたのである。

(11) 藤田一郎が土方久元に宛てた一月二一日付の書簡には「…前略…議官（佐々木のこと、引用者注）も、全ク非常ノ勉強・飽ク迄民間ノ実況ヲ探ラント欲ス、此ノ故ニ、昨日木造村ヨリ鱈ヶ沢村ニ至ルヤ、積雪四尺餘ノ道路ヲ踏ミ、加ワルニ昨日ノ烈風雪ヲ飛シ、殆ンド咫尺ヲ弁ゼザルガ如シ、之ニ加フルニ、馬足頻リニ蹶、賤（藤田自身のこと、引用者注）尚全ク堪ユル克ハズ、況ンヤ五十以上ノ人ヲヤ、御了察被賜度奉存候、抑モ此ノ路ハ、当管内一二ノ難路ニシテ、本年一月ニ至リ凍死スル者一名アリト…下略…」

(12) 『佐々木日記』九、一一頁）とその一端を伝えている。

(13) 『佐々木日記』九、一七頁。

(14) 同前 三六頁～三九頁。

(15) 『明治天皇紀』第五、四八頁。明治一三年四月八日「午後三時宮内省御用掛元老院副議長佐々木高行を召し、高行が畏に勅命を奉じて視察せし奥羽地方の情況等を奏上せしめたまふ」とある。佐々木は三月一三日に元老院副議長になった。これは同年二月の

政府改造に伴うものであった。

(16) 『佐々木日記』九、九一頁。

(17) 同前、九一頁、九三頁、九四頁。

(18) この表は、『佐々木日記』中に記されている青森県関係者の書簡から作成したものである。山形・秋田等の人々からも同様に多くの書簡が出されたことも念の為にこわっておく。

なお『佐々木日記』を見る限り、明治一三年初の巡視以前の時期においては日記中に青森県関係者の佐々木宛書簡は見出すことはできない。『佐々木日記』は全一二巻・明治一六年までで刊行完結したが、この表を明治一三年・一四年に限ったのは、煩雑さをこれ以上増大させない為のことで他意はない。

(19) 『岩倉公実記』下、五四一頁～五五四頁。そして具体的な方策として

「士族就産資本ヲ地方官ニ附スル事」「工業ヲ勧導スベキ事」

「各地方ニ農工学校ヲ設クル事」の三項をあげている。

(20) 同前、六四三頁～六五二頁。

(21) 『井上毅伝 史料篇第四』三四二頁～三四三頁。

(22) 明治一四年政変と中政党に関しては、大久保利謙「明治一四年の政変」（『明治政権の確立過程』明治史研究業書一所収）、及び梅溪昇「明治前期政治史の研究」を参照されたい。

(23) 津田茂麿「明治聖上と臣高行」、四五四頁。

(24) 山田は旧熊本藩士で天保三年生。明治三年上木権大佑、明治四年八月大蔵省七等出仕、同年柳川県権令を経て、明治九年八月青森

県令となる。明治一五年一月在職のまま没。（『百官履歴』、

「明治過去帳」など）

(7) 肴倉弥八「青森県令山田秀典の馬耕奨励」「うとう」三十一号「弘前市史明治大正昭和篇」九九～一〇〇頁、など参照。

(8) 「復命書」の引用にもある如く、青森県令はしばしば交替している。

明四・一一・二 菱田重禧（大垣士）〔免本官明六〕

六・八・二一 北代正臣（高知士）〔補内務省五等出仕明七〕

七・三・五 池田種徳（広島士）〔卒 明七・九〕

七・一一・七 塩谷良翰（栃木士）〔免本官 明九〕

九・八・二一 山田秀典（熊本士）〔卒 明一五〕

一五・一・一四 郷田兼徳（鹿児島士）〔任参事院議官補・明一六〕

一六・一二・二二 福島九成（長崎士）〔非職・明一九〕

一九・七・二四 鍋島 幹（佐賀士）〔任広島知事・明二二〕

といった具合であり、山田県令の在任期間は歴代の県令の中では最長であり、また明治一〇年代前半をおっており、自由民権運動期でもあり、今後改めて調べる必要があると思われる。それは明治一四年一〇月に起こる県令と郷田書記官・大道寺・笹森らとの対立事件についての研究にとどまるだけではないと思われる。

（『弘前市史 明治大正昭和篇』四〇～四四頁など）

(2) 「佐々木日記」一〇、三四頁。

(3) 同前 四四頁。

(4) 横山武夫「笹森儀助の人と生涯」及び、肴倉弥八「笹森儀助と

農牧社」「うとう」三三三号など参照。

(5) 例えば橋本正信氏の「青森県の自由民権運動―弘前地方を中心に―」（『弘前大学國史研究』三三三号）及び「国会開設運動期の青森県の動向―明治一二年代を中心に―」（同前誌 五二号）はそ

の中でも基礎的な仕事であろう。

附記・本稿の作成にあたって、貴重な蔵書の閲覧と紹介を許された国学院大学図書館に御礼申し上げます。また「奥羽記行」の閲覧に際して宮内庁書陵部の柳雄太郎氏に御力添頂いたことに感謝する。

（青山学院大学助教授）

表Ⅰ 佐々木高行奥羽巡視の行程（概略）

月	日	行程・その他
明治12年10月	29	東京発 古河・宇都宮・白川 經由
11	4	会津郡若松町着 11月7日まで滞在 11月8日発
	10	米沢着 11月12日まで滞在 11月13日発
	17	山形着 11月21日 〃 11月22日発
	24	新庄着 〃 〃 〃
	25	鶴岡着 11月26日まで滞在 〃
	27	酒田着 11月29日 〃 11月30日発
12	2	本庄着 秋田県入り
	4	久保田（秋田）着 12月5日～12月13日佐々木病氣
		12月18日～12月22日佐々木、太曲、横手、湯沢等巡視
	30	能代着 12月24日まで滞在 12月25日発
	31	二ツ井着 新年迎え、一日二ツ井滞在
13年1月	2	鷹巣着 花輪經由
	5	大館着 青森県入り
	6	碓ヶ関着 以後2月18日一戸着で岩手県に入るまで青森県下を巡視（参照表Ⅱ）
2	18	三戸発一戸着 2月28日まで盛岡滞在、帰京命令の電報来る。
	20	盛岡着
		帰京

表Ⅱ 佐々木高行青森県内巡視行程

月	日	巡視箇所	面会・陳情者等
1・6		碓ヶ関	青森県三等属山下鉄孝（以後随行） 南津軽郡長唐牛桃李 出迎
7		碓ヶ関―八幡館―猿賀―黒石	猿賀神社神職依木穂波、家禄奉還士族一三名、総代三名、他（官林処分不公平、地租改正不適當等）
8		黒石―大釈迦―弘前―青森	伊東善五郎宅泊
9		青森滞在	県庁にて県令山田秀典の説明あり。
10		〃	県令宅にて懇親会、山田県令（青森の民情）
11		〃	県九等属榊原政通（熊本より招いた老農）（青森県農事之事）
12		〃	県令同道にて市中巡視
13		〃	研商協会、依木穂波、中津軽郡長笹森儀助（士族の現状を憂う） 青森新聞社小川渉
14		青森―浪岡	県会議長大道寺繁禎、黒石住益田茂苗
15		浪岡―藤崎―弘前	葛西宇八郎宅泊、士族川越石太郎、手塚強（行政論） 士族傍島正邦、三浦栄方（弘前市中ノ景況） 士族鹿内治郎作（県内民心） 士族工藤吉次郎、江良次兵衛、中津軽郡九ヶ村総代藤田豊三郎他、菊地九郎、本田庸一他。
16		弘前滞在	興業社（士族の結社）社長小林忠之丞、取締笹森要蔵（凶荒予備ノ事）、大道寺繁禎、武田清七（弘前第一ノ豪商） 商人今村要太郎、藤田半石エ門、竹内智吉（市街景況） 士族八木沢彰太郎（学校之儀） 同小林忠之丞、谷口永太郎、間山菊弥（金禄改定ノ儀） 同菊地楯衛

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
〃	〃	〃	〃	〃	青森滞在	五林平―白銀―浪岡―大釈迦―青森	金木―長富―飯詰―野里―中野―五林平	金木滞在(大雪)	五所河原―桧田―長富―嘉瀬―金木	木造―五所河原	木造―鰐ヶ沢	弘前―三和―桑畑―木造	〃	〃
<p>(山林ノ儀) 同山崎忠之進(津輕郡内景況)</p> <p>同杉山龍江、館山斬之進、小山内鉄弥(県下景況) 下沢保躬(長慶天皇陵墓ノ件)</p> <p>下沢保躬</p> <p>松木七右エ門方泊(笹森儀助同行) 僧菊地勇義、黒滝仙吾外(民情)</p> <p>長井庄兵衛方泊、西津輕郡長蒲田昌清同行</p> <p>土族野口長兵衛(運上会社設立云々)</p> <p>三上宇右エ門方泊、菊地勇義(津輕凶歳録持参) 北津輕郡長工藤行幹(郡治、郡況)</p> <p>角田長三郎方泊 郡長同行金木他六ヶ村人民(十三河口水利ノコト、山林局ノ失錯、地租改正)</p> <p>米田慶助方泊</p> <p>藤田一郎長慶天皇陵調査(1月28日まで)</p> <p>郷田書記官</p> <p>1月30日まで佐々木、風邪、榊原敬作(県下事情書)</p> <p>土族(旧斗南) 小川涉(旧藩士困難陳情)</p> <p>土族石郷岡品(青森ニ造船所建設上申)</p> <p>弘前土族川越石太郎(土族困窮)、中津輕郡独狐村木村等鑑、大道寺繁禎(地方官会議傍聴ニ上京)</p> <p>浪岡村平野清七、県八等属謙田政通(長慶天皇陵) 郷田書記官、笹森儀助、小川涉(民情)</p>														

2・1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
〃	〃	〃	青森―船―下北郡安渡	安渡―大平―田名部	田名部滞在	田名部―大畑	大畑―田名部	田名部―中ノ沢―船―横浜	横浜―有戸―野辺地	野辺地―坪―七戸	七戸―三本木
<p>東津輕郡長、岡本伴佐勇、小川涉、川越石太郎(上書)</p> <p>笹森儀助、下北郡長石亀政祥</p> <p>郷田書記官(旅費不足ニ付二〇〇円県ヨリ借リル)</p> <p>久保庄助方泊、下北郡長石亀同行</p> <p>戸長菊地弥左エ門(土族生計困難、官林之苦情、牧場ノコト)</p> <p>佐々木胃病、郡長石亀(本部之来歴)</p> <p>戸長大塚小平太、旧斗南土族坂部三十郎、大竹盛税(生計困難)</p> <p>杉山源治郎方泊、小野三右エ門、戸長横浜正蔵(村況)</p> <p>安田彦兵エ方泊、上北郡長藤田重明、総代野村治三郎、埜坂勘右エ門、飯田記代七(山林人民難済)、馬門村総代亀田市松他(入会山林)、土族(旧南郡) 飯田記代七、中村治郎右エ門、角鹿嘉十郎(土族困難、開墾資金拜借)</p> <p>土族(旧斗南) 鋤柄伴之進、新妻伝蔵、江口与一(御手当金之儀ニ付)</p> <p>浜中幾三郎方泊、下北郡長石亀(明九年巡幸ノコト)、上北郡長藤田(風土景況概略調)</p> <p>戸長駒嶺正総、総代山田改、盛田廣精他(官林ノ苦情)</p> <p>土族(旧南郡) 立石信次郎(新渡辺伝の子)</p> <p>土族(旧斗南) 篠原金之丞、桜井政衛、土屋惟幾、神尾左仲(旧斗南貴族困難ニ付具上書)</p> <p>土屋惟幾(旧主松平容大御加増云々) 百石村支村三沢村小比類巻喜太郎、他</p>											

4	2							14	12		11						
12	19	3	26	23	21	17	16	5			3	12	20	11	25	8	
藤田重明	二川原豊八郎(弘前藩卒惣代)	近田蘭平	藤田重明	原市藏	渡辺村男	笹森儀助	大堀武(鱒ヶ沢)	蒲田昌清	大道寺繁禎	岡本虎佐男(津輕郡長)	笹森儀助	山田秀典	浜中幾次郎(上北郡七戸村)	藤田重明	渡辺村男	高坂久兵衛、今野ツル(弘前)	依木穂波(猿賀神社)
上北郡景状、右大臣殿下高覧ト	近日出京、御尽力ヲ云々	長慶天皇陵云々、同伴ニ付別紙	三本木開墾云々	年賀、昨年ニ比シ一層ノ大雪、	三戸郡内馬耕生ノ事、三本木開墾ノ件云々	年賀、大道寺ト牧畜開墾始メ云々	年賀、潮風防屏風山ノ件、北郡ノ水害除ノ件	南麓開墾牧畜	年賀、笹森宛起授産ノ一助岩木効不鈔云々	年賀、本県ノ景況、馬耕伝習ノ効不鈔云々	年賀、青森県会議員半数改選、大道寺議長云々	弘前市街復旧云々	自家牧畜ノ件、馬献上ニ付云々	別紙ニテ青森県上北郡景状書	栃内吉忠先生伝送付	今野久吉御世話ニ相成云々礼状	青森帰着、出京中特ニ斗南士族云々御世話...

15	1	12	11	10	9	8	6	5
・	7	27	12	6	2	15	19	27
	14			29		24		15
渡辺村男	山田秀典	渡辺村男	桑田篤之助 (猿賀神社祠掌)	笹森儀助	近田奈平 (蘭平)	同	同 (\times)	川越石太郎 (弘前士族)
補助金分借ニ付テ分明	巡幸ニ際シ長慶天皇遺物天覧ノ件不調云々	巡幸無事、県下ノ報告	巡幸ノ報告、八戸ノ景況報知	猿賀神社神階昇進願ノ其後	「中正党」ニ関スル扶桑新誌ノ記事ニ感激スル	青森ニオケル県令ト大道寺、笹森、郷田ノ対立ニ付、	県ノ政情(県令ト大道寺等ノ対立)ニツイテ	旧弘前卒ノ事業貸金分借歎願ニ付礼状
紙斗南藩士族願ニ付云々	世情ニ付感想	補助金分借ニ付テ分明	弘前ヘノ巡幸ヘノ尽力依頼	牧畜資金拝借ノ件云々	帰県後、巡幸ニ際シ士族他デ準備云々	巡幸ニ際シ長慶天皇遺物天覧ノ件不調云々	巡幸無事、県下ノ報告	巡幸ノ報告、八戸ノ景況報知
猿賀神社神階昇進願ノ其後	「中正党」ニ関スル扶桑新誌ノ記事ニ感激スル	青森ニオケル県令ト大道寺、笹森、郷田ノ対立ニ付、	県ノ政情(県令ト大道寺等ノ対立)ニツイテ	旧弘前卒ノ事業貸金分借歎願ニ付礼状	農家秘書下賜ノ礼状			